
忘れない、君と過ごした短い春

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れない、君と過ごした短い春

【Nコード】

N5451B

【作者名】

春功

【あらすじ】

短い春の出来事をまとめた短編集。一度は完結しましたが、次の春の話の二話目がはじまります。オオミヤ駅とオオミヤソニックシティで起こる、春の悪戯。アライハルカとヨコカワカヨは出会いながら、お互いを知り、そして大事なことを知っていく。一話目を読まなくても、短編集なので、物語的には全く関係がありません。十月三日に読者数が予定していた規定数を超えたので第三話を掲載します。お楽しみに！

【春一、一輪の花】1、あやめ（前書き）

春は短く、とても長い。

【春一、一輪の花】 1、あやめ

「あやめ？」

花瓶に入っている数輪のあやめが、風でゆらりと揺れた。

春らしい外の涼しい空気が、病室の重い空気を払拭してくれた。

お見舞いの品として持ってきたのだが、彼女が好きな菓子詰めを持ってくる予定だったのを、金欠により取り止めたことは内緒だ。

それなりには、役に立ってくれそうだった。

「ああ、好きだろ…あやめ」

「ふふっ、確かに私の名前はアヤメだけど、私が好きなのはカスミソウだよ？」

笑った顔が、可愛かった。

「うえっ？そうだった…」

と言って、髪の毛をバリバリかきむしる。

「あはは、また出た。」

「うえっ」

、口癖だよね、慎ちゃん」

その笑顔に、少しだけ安堵して、俺も笑った。

もう20になると言うのに、まだ彼女は俺を

「慎ちゃん」

と呼ぶ。

腐れ縁だったらあり得るかもしれないが、まだ彼女、イツキアヤメとは出会って一ヶ月しか経っていない。おかしな事かもしれないが、彼女とはこの病院で知り合ったのだ。

俺がバイクで事故って、この病院にかつき込まれて。

そして、出会った。よくいう、運命の出会いなんてものではないけど。

「まだ、寒いだろ。窓閉めるよ」

三月にしては涼しい風を通す窓を閉める。途端、医薬品の臭いが鼻についた。

振り返ると、フリルをあしらった淡いライトピンク色のパジャマがそそった。

なんだかクマのぬいぐるみをいじっている。テディーベアというやつだろうか…

「慎ちゃん…大学はいいの？」

「……いいんだ。俺は頭が良いから大丈夫なんだよ」

なんて、そんな戯れ言を言ってみた。

「……………よ」

「えっ？」

彼女の言葉が耳に届かない。

ただ機嫌を悪くしたように、頬を膨らませている。そんな姿だけを見れば、子供みたくにも見えるのが不思議だ。

ぼいっと、ぬいぐるみを俺に投げつけた。

「なんだよ」

「……なんでもない」

陰が入ったように彼女の表情が暗くなる。

どこか体調が芳しくかんばないのかもしれない。

俺は彼女がなぜ、ここに入院しているか分からない。どんな病気なのか、どんな怪我なのかすら俺は知らない。

ただ彼女はここに一年近く入院しているらしいと言っただけは聞いた。それから判断するに、重い病気なのかもしれない。だが、彼女を見る限りそんなふうには思えなかった。

「ねえ、覚えてる？ 私たちが出会ったときのこと」

それは、一ヶ月前の二月十四日のバレンタインデーだった。俺が事故ってから三日経ったバレンタインデー。きつと生涯で最悪のバレンタインデーだった。

彼女と会うまうまでは。

2、聖バレンタイン、回想

出会ったのは、俺がこの病院の中庭で歩くりハビリをしていた時のことだった。2月の寒い空気に、マフラーもまだ手放せない陽気だった。

太陽の光は、しっかりと大地に降り注いでいる。でもその暖かさも、まだ感じられない。

ここの付近では2月に雪が降る。

その名残か、まだ溶けきれていない雪が木の枝に残っていた。目に付いたのはそれだけじゃない。

誰もいない寒い中庭に、古びた木のベンチが一つ。

そして、その近くに車椅子に乗っている女の子がいた。

「？」

その女の子は泣いていた。

上を見て。泣いていた。

長い髪、流れるような黒髪に、少し顔立ちは幼くも見えたが、整っている方だと思う。

安物か、分からないが桜の髪飾りが、チョコツとつけられていた。

乳白色のコートに、薄いブルーのシヨールを巻いて、膝には可愛いウサギが描かれた膝掛けがあった。

彼女は寒そうに、白い息を吐いて、上を見つめていた。

その視線を追いかけるように、視線を向ける。

その先には一本の桜のみ。

枯れた、枝だけの、たったそれだけの。

「私、春が好き」

「……は？」

その濡れた顔で、見つめられた。

一瞬、心臓の鳴る音が、ドクンと高鳴ったのが分かった。

「あなたは、どう思う？」

そのまま、彼女は笑った。目じりに透き通りそうな悲しみを残しながら。俺に話しかけていると気づくのに数秒。そして我に返った自分があげた第一声は災難だった。

「うえっ？オレ？」

「うえっ??にはは…なにそれ」

ぼっと、火が灯^{とも}ったように顔が赤くなったのが分かった。うえっ、とか、うあっ、などの口癖は幼少からの癖でなかなか直らない。もちろん、直そうとも思っていない。

「あ、いや、その……」

急に恥ずかしくなって、顔を背けた。最悪だ。

一回、鼻をすする。

「君は、ここで何やってんの」

ありふれた言葉しか出てこなかった。

「………桜、好き」

「は？」

足が辛い。

「あのピンク色の。花びら。ちらちら。あれが好きなの」

でも、まだ2月だ。梅なさいざ知らず、桜が咲くのはずっと咲き。春は遠い。

そう言つと、彼女は

「しってる」

と愛想笑いを見せた。

そして、ゆっくりと立ち上がつて、枝だけの桜の方へ歩き出した。膝掛けが、はらりと緑の芝生に落ちた。

桜の前まで来ると、空を仰ぐように両手を空にかざす。

「もし、魔法が使えたら」

と、目を瞑つて彼女は言った。

次の言葉を溜めている。彼女の心の中で、ぎゅっと深く噛みしめているように。

「桜いっぱい……くちん」

待っていた言葉の途中で、思いつきり可愛いクシャミをしてくれた。

「あはははっ、面白いつ。お前、面白いやつ」

さすがに

「くちん」

は可愛すぎる。本当に面白い。

今度は彼女がリンゴみたいに赤くなった。

「……ばかっ！」

ぷいっと、横を向き、すたすたと自分の車椅子に戻る。

その途中で、べえーっと舌を出して、悪態をつくのをおぼれぬのがまた、笑えた。

「ククツ…おい、ちよつと待てつて」

「なによ、このバカちゃん」

バカちゃん…なんて言葉、久しぶりに聞いた。笑いを堪えるのにまた、一苦労だった。

「イツキさん、もう中に入りましようか？」

振り返ると、すぐ近くに看護婦が立っていた。きつと彼女の面倒を任せられているのだろう。柔和な顔が印象的な人だった。

「ミユキさん…分かりました。今行きます」

ゆっくりした足取りで車椅子に向かう。

俺も彼女に追いつくために松葉杖で急いだ。

追いつくと、彼女は寒いのか、両腕を絡ませて震えているのに気づいた。

「ほら、寒いだろ。マフラーやるよ」

彼女の首もとに自分がしていた赤いマフラーを巻いてやった。
笑わしてもらったお礼に。

「!?!」

驚いた顔を一瞬見せた後、急に俯うつむかれてしまった。

「なんだよ」

そう言っても、彼女は面を上げてくれない。

無口のまま、俺の少し前を歩く。

車椅子の所まで来たとき、やっと口を利いてくれた。

「……ありがとう、じゃあね」

口が面白いわりに可愛いことを言ってくれる。

別れの挨拶代わりに、惚れるか。なんて戯言ざれごとを言ってみた。

彼女から返された言葉は

「バカ」

だった。

そのまま中庭を後にする。松葉杖を無様について。

まあ、こんなバレンタインもましかな、なんて思いながら自分の病室へ戻る。

背後には、まだ看護婦とあの女の子がにこやかに話している。

面白い女の子だ、と思った。病院にそぐわないおかしな感じで、楽しかった。

彼女がこんな所にいるのが、不思議だった。

だけど、何も知らない自分がそこにはいた。

これが名も知らない少女と俺の出会いだった。

後、年を聞いて「同じ年だ」と言うことに腰を抜かしたことは秘密だ。

3、バレンタインのアイス、チョコレート味

それから、彼女との再会はすぐにやってきた。
お決まりの数日後に、ではなく一時間後に。
短い。

彼女が、俺の病室に来てくれたのだ。
突然のことに驚いてしまった。

こんな短くて良いのか、と呆れてしまったのも事実である。
こういう再会では、良いシチュエーションで、感動するのがセオリーだ。

それを見事に打ち破ってくれた。
しかも、来た理由を聞いてみると、

「返しに来た」

そんな戯言ざれごととともに赤いマフラーが投げ返された。

「何を？ つて、うええええええつ？」

そんな言葉しか俺には返せない。

しかも今度は車椅子ではなく、普通にすたすたと歩いて、ドアの先からひよっこりと顔を出したのである。そう言えば、自分の車椅子に戻るときも、普通に歩いていたことを思い出す。どうやら、車椅子は疲れないための措置らしい。

ベッドの隣にある一つしかない丸イスにチョコッと申し訳なさそうに座る。

「なによ……」

そして、睨にらまれた。

(座っても良いなんて言ってるねえよ…)

まだ、よく状況が飲み込めていない俺は、ただ混乱するばかりだった。

片足を上から吊られて間抜け顔をしている俺をみて、少し微笑。

「なんだよッ！」

「何でも」

そんなにぶつきらぼうに言われたら、嫌われてるみたいじゃないか。数秒間、二人とも喋らなかった。気まずいせいもあるか、彼女も口を閉ざしたままだ。

俺は返された赤いマフラーを弄もてあそびながら、彼女の顔を見る。

「タケマサシンタロウ……さん」

「うえっ？」

目を開かせた瞬間、突然彼女が俺の名をボソツと言った。

「あれ？オレ、名前言ったっけ？」

記憶の中では、自分の名前を言った覚えはない。

当たり前だ。出会ったのは、たった一時間前なのだから。名前を言う暇もなかったはず。

彼女は、あれ、と言って、申し訳なさそうに病室の入り口を指す。

「病室の入り口に名前、書いてあったから…」

病室の前のネームプレートを見て、俺の名前を知ったというのだ。至って、興味を持っていないのか、言葉のリズムは平淡だ。恥ずかしいのか、俯き加減うつむに下を向いていると、彼女の表情が長い黒髪に隠されてしまつて、よく分からない。

「合ってるでしょ？名前…」

そのプレートは漢字表記だから、読み方を聞いているらしい。武政慎太郎。確かに合ってる。

「お、まえは？」

「え？」

照れくさくなつて、俺は顔を背けた。

彼女が俺の名前を知っていても、俺は彼女の名前を知らない。そんなの卑怯だ。俺だけ名前を知らないなんて。

「イツキアヤメ」

そう透き通つた声が聞こえた。

「アヤメ？」

「そ。アヤメなんて名前だけど、好きな花は霞草かすみそだから」

そこまで聞いていない。

ちよつとした溜め息をついて、呆れ顔を見せる。

「んで、何の用だよ」

まさか、足の吊られた無様な俺の姿を笑いに來たわけではあるまい。

「くれたマフラーを返しに來ただけ。それと…」

ほら、やっぱり。タダより安いものはないってか。

「これ…」

俺の前に出されたのは、ビニール袋だった。

身を構えてそれを受け取り、中身を確認してみる。中にはいくつものアイスが。

それもチョコレート味のみが三つも入っていた。

「これは？」

「……お礼」

次期的に、アイスの季節ではないのは確かだ。三つもあつたら、お腹を壊すどころではなく、しかも病院にいるのに、お腹を壊すという、冗談では済まされないことになる。

そんなオチだけは嫌だ。

そんな嫌な事を考えていたら、顔に出てしまっていたらしい。

「このバカちゃん！」

「ぐえ」

頭を、ゲンコツで一発、コツンとくらわされた。
蛙が轢かれたような声を出して、情けない顔で頭をさする。
涙目なのはカツコ悪いので秘密。

「痛えなッ！」

「知らない」

可愛い顔をして、やることは本当にツンツンしている女の子だ。はつきり言って、可愛いのに勿体ない。その性格と言葉遣いがネック。しかし、バレンタインに、こんなアイスを貰うとは、思いもしなかった。

「んで、いいのが、貰っても」

仕方なく、袋を貰う。

「ん、今日は特別だから」

そう言っつて、にっこり笑った瞬間、次の言葉がいけなかった。

「バレンタインだから？」

顔から、本当に煙が出てしまつぐらい赤くなって、彼女は硬直してしまった。

「ば、バカ！義理だからね！あ、……」

墓穴を自分で掘っていた。

「ぶ、あははッ、はははッ！」

大笑いして、本当に小さくなってしまった彼女の肩をバシバシ叩く。

「もう知らないっ」

俺の顔を見ることなく、ぶっきらぼうにドアの方へ行く。フン、と鼻でつつぱっているようにも見えた。

「さんきゅ」

ぼそっとお礼を言ってみた。

すると、彼女の歩みが止まった。背中をこちらに向けたまま、微動だにしなかった。

どんな顔をしているか分からなかったが、きっと曖昧な顔をしているのだろう。

「勘違いしないでよ、ほんとにマフラーのお礼なんだから」

そう言っつて、出て行った。

そんなに、マフラーのお礼にしたいのか、ちょっとばかり凹^{へこ}む。

先頭きつて、あそこまで否定されたら、こちらも微妙だ。だけど、うれしかった。

たった一時間前に出会ったばかりで。しかも、マフラーを渡しただけ。

その見返りが、アイスとは笑える。

まあ、チョコレート味にしたのは、今日がバレンタインだから、というのもあったをだな、なんて自分勝手に決め付けてみた。

「春は来ないか…」

まあ、当たり前だよな、と一人ごち。

こんな時に入院して、見舞いに来てくれたのは家族だけ。

女の子一人、来やしない。

くそ、と心の中で毒づく。だけど、空しいのには変わりない。病室の騒がしさも彼女が出て行ってから消えてしまっている。

「はあ」

ビニール袋を握りしめ、長く息を吐いた。

これは秘密だが、そのアイスにはスプーンが付いていなかったのだから、自分で売店まで取りに行ったのは、今でもアヤメに言っていない。

4、真実と大切なもの

それから一ヶ月、もちろん俺が、退院してからも、ちよくちよくとあやめに会いに行き、二人の親交を深めた。

「ねえ、慎ちゃん」

この呼び名になったのも、本当につい最近のことだ。それまでは、しんぴー、なんていうあだ名で呼ばれていた。どちらも恥ずかしかったが、これもこれで、嬉しい。

「なに？」

「あそこ、見て」

窓際のほうを指差す。

そこには何も無い。

「違う…、外。外だよ」

三階のこの病室からは中庭が見えた。

患者がまばらに看護師と一緒に歩いているのが見える。

「桜、か？」

「うん」

その窓からは、あの枝だけの、枯れた桜が一本立っているのが見えた。

俺たちが初めて出会った場所。

そしてアヤメが好きな場所でもある。

「それが、どうしたんだ」

「咲かない」

「？」

「咲かない」

「??？」

「咲かない」

意味が分からなかった。

何度も繰り返し返す。まるで壊れたレコードのように。

咲かない、と。

「あの桜、好き。でも、咲かない」

知ってる。

アヤメがどんなに、あの桜が咲くのを心待ちにしているのかを。

だっていつも見ている、ここから。

それか、桜の木の前のベンチで。

「咲いて、欲しい？」

「…」

聞いてはいけない質問だったのかもしれない。彼女は、少し黙って、

言った。

「知ってる？願いが叶う宝石の事」

「え？」

返ってきた答えは、質問と違うものだった。

「私も、ミユキさんから聞いただけで、よく知らないんだけど。どんな願い事も叶える宝石があるんだって。三つまでだけど。透明の光る玉のような宝石らしいの」

聞いたことが、ない戯言ざれごとだった。

でも、言っているアヤメ本人の顔は真剣そのものだった。何か、言いたいことがあるらしい。

「なら、お前なら…」

「？」

「もし、魔法があるとして、お前なら、何を叶えたい？」

「慎ちゃん？」

見ているこっちが苦しくなってしまった。

いつものアヤメと違う。いつもの覇気がない。

まるで、そう。あっけなく散っていく桜の花びらみたいな感じがした。

なら、俺に出きることは何だろう。

「明日は、誕生日だよな？」

「え」

「叶えてやるよ。魔法使いみたいに。その願いが叶う宝石のようにさ」

驚いたようだ。

自分自身も、驚いている。こんなことを言える、なんて思っていなかった。口から勝手に出てしまっていた。恥ずかしい。

きっと彼女も、ふざけていると、分かっただけで笑い飛ばすだろう。そんなこと、俺には出来ないことも知って。

「ほんと？」

「うえっ？」

だが、本気にしていた。

「あ、いや、その」

「ほんとのほんと？」

口から出た錆だけど、彼女のためなら、やってもいいと思う。

それに、そんな風に叶えて欲しいなんて、子供みたいで可愛い。

「ああ、わかった。でも…」

「それなら、宝くじ一等！それと、私の好きなお菓子いっぱい！あと…」

それと、俺が出来る範囲内なら、と言おうとしたが、聞いていなかった。

そんなの無理だ、と心の中でぼやく。

「あと、あの桜を咲かせて。花咲かお爺さんみたいに！」

「！」

「いっぱい、さくら！は……くちんッ」

可愛いクシャミをまたしてくれた。

「ぷ…、はははッ」

「慎ちゃんのバカちゃん！」

顔を真っ赤にして、怒るが俺の笑いは止まらない。

「あは、ごめ…。だってお前、はは。だけど、今言ったのは無理だよ、はは」

「だって、何だって良いつて、慎ちゃんが言ったじゃない」

「だからオレの出来る範囲で、考えてくれよ」

言う前に、お前が暴走したんだよ、なんて言えない。心の中に、押し込んで封印。彼女は、うーんと悩む仕草をする。そして言った言葉は、

「無理」

「即答すんな！」

「だって…」

「んなら一つ目は、当たりくじなんて無理だから、宝くじを買ってきてやるよ（アヤメの金で）。今なら、ほら。確かグリーンジャンボだろ？間に合うはずだ」

「それって…」

「そう、当たるかはズれるかは運次第。オレだってエスパーじゃないんだから、当たらせるなんてのは無理だ」

そんな事が出来れば、俺だってもう億万長者になっている。

「…逃げてない？」

「無理言うな。出来ないものは出来ない」

そう言うと、彼女は頬を膨らませ、苦い顔をする。俺だって引かない。引けない。

「なら、いい」

ツン、と顔を背け、彼女はひねくれモードへ突入。

「しょうがないだろ。それは無理だよ」

「……………」

口を閉ざしたまま、こっちの顔を見もしない。
完全に拗^すねている。

「アヤメ……」

「それなら、二つ目は大丈夫だよ。私の好きなお菓子を買ってき
て。杏子屋の菓子詰め。これからそんなに高くないし、大丈夫だよ
ね?」

そうだな、と言いたい。だが、それは言えない。

今日買ってきたあやめの花束で、お金が底をついてしまった。ただ
でさえ、お金が無くそのお菓子の菓子詰めを取り止めたのだから。
しかも、その文無し理由は、自業自得で遊ぶお金に消えてしまっ
た。

そのまま、脱兎^{だつと}の勢いで、俺は平謝りの姿勢に。ぺこり。

「じめんなさい」

「……ダメ慎ちゃん。……それなら、マフラーがいい」

「まふらー?」

それは考えていなかった。

しかも、慎ちゃんの赤いマフラーがいい、というのだ。

「オレの?」

「うん。……だめ?」

甘えるような声で聞く、と思う。そんなんじゃ、断りきれない。考えれば、菓子詰めと比べ、お金も掛からないだろうし。それに、自分のマフラーとなれば、自分の経費は0。これほど、楽なものはなかなか無い。

「そんなんでいいのか？」

でも、お金が無いといっても、そんな物じゃ、男として恥ずかしいと思う。

自分の使い古しより、店で買った方がいいのも確かだ。それくらいのお金はある。

それに、女の子の前だから良いカッコしたいというのもある。

でも、アヤメはその問いにも、ふるふる、と首を振り、受け付けなかった。

「私は、慎ちゃんのがいいの。あの赤いマフラーが欲しい」

「分かったよ。明日にでも持ってくるよ」

確か、ダンスの中にしまえばなしのはず。家に帰ったら、速攻に探さなくてはいけない。

「じゃあ、三つ目のお願いは、桜を咲か」

「無理」

少しからかって、間髪を入れずに断ってみた。今度の彼女は、呆れモードに変化。

「はあ、慎ちゃん…何も出来ないんだね」

「当たり前だ。そんなん出来たら、オレ、歴史に名を刻んでる」

「じゃあ、それならせめて、私と行って。あの桜が咲いたら、一緒に見てくれる？」

グレードがいきなり落ちた。

俺って、本当に甲斐性無しなんだと初めて思い知る。そんな自分に少し落ち込んだ。

「分かった。あの桜が咲いたら、アヤメと一緒に見に行こう」

「約束だよ」

そう言って、俺が持ってきたあやめの花を一輪、俺に差し出す。

紫色の花が付いた植物を、一輪差し出す。

「？」

「私との約束」

だから、受け取って、と言いたいらしい。

意味も分からぬまま、約束をした証明として、俺は手を伸ばした。紫の花が、アヤメの手から、俺の手に渡される。

「私の気持ちだから」

「え？」

「慎ちゃんは優しいすぎるよ。私の為に、何度もお見舞いに来てくれて。そしてこうやって私と話してくれる。それだけって言ったなら、それだけかもしれないけど。でも私にとって本当に幸せ。幸せなの心の寂しさを、彼女は吐き出した。その顔は、苦しいものではなく、安らかな表情だ。

俺はアヤメのその姿に、目を奪われていた。それは確かだ。

「だから、慎ちゃんも。私と約束して。どんなことも嫌にならないで」

「……………」

貰ったあやめをぎゅっと握りしめた。

「私はアヤメ。だからそのあやめは、私と同じ。お守り……………は、くちんッ」

「……………」

「……………」

「ぶ、ははは」

「はははは」

二人して、笑った。今度は。少しの間、一緒に笑いあう。ひとしきり、笑った後、アヤメがコホコホと咳せきをした。少し調子に乗りすぎたらしい。

「もう、寝るよ。オレ、もう行くから」

「うん。明日忘れないでね」

「分かってる、じゃあな」

「約束だよ、慎ちゃん。バイバイ」

俺も、片手で手を振り返す。そして、病室を後にした。

それが、最後の言葉となった。

俺がアヤメと最後に言葉を交わした瞬間となった。

俺がアヤメの笑顔を見た最後の瞬間となった。

それを、俺は知らない。

0、春の一日は終わり、桜は咲く前に散った

次の日の病院。つまり、彼女の誕生日。

昨日約束したマフラーを手に持ちながら、気分はつきつきしていた。あのマフラーが欲しいなんて、可愛いよな、なんて思いながら、アヤメの病室の前で深呼吸。

喜んでくれるのか、と疑問に思う。

まずは、彼女の顔を見るのが先決だ。

そう思い、勢いよく引き戸を引く。ノックをしないのはブラックジヨークを織り交ぜた俺なりの意地悪だ。

彼女の怒った顔を想像し、少し顔がにやけてしまった。

「ウソだろ」

だが、彼女はいなかった。

約束した、赤いマフラーをぽろりと地面に落とす。

彼女の病室はもぬけの殻。無機質な、ベッドがあるだけ。

そこに、彼女がいた痕跡は見られない。

まるで最初からいなかったような、幻を見ているような衝動に駆られた。

分からない。

「なんだよ、これ」

まるで意味が、分からない。

昨日までは、確かにここにいた。

彼女が、ここに。

だって、昨日、ここで、俺に…あやめを一輪…

「くれたじゃないか…」

窓際の花瓶には、わざと残されたかのように、枯れたあやめが一輪だけ挿してあった。

茶色になった、それが。

「どこに…」

約束した。桜が咲いたら、一緒に見ようって。

それで、くちん、って笑った。

そんな思い出すら、完全に否定されたかのように、真っ白だった。

「タケマサさん…」

後ろに、ミユキさんがいた。

その姿を見て、俺は我慢できずに泣いていた。

「み、ミユキさん…アヤメ、どこに…っ…」

泣き^{すが}継^{すが}った。

汚く、惨めに、訳が分からなくて、^{すが}継^{すが}った。

「イツキさんは…もう、いません…」

「うあっ?」

一瞬、何を言っているか、分からなかった。

「いないんです」

もう一度、最後の宣告を、俺に聞こえるように、はっきりと…

「う、そだ…」

死んだ？

「うそだ！だって、アヤメはあんなに元気で、昨日までも、俺にあんな笑顔見せて…」

生きていたのだ。

ありえない。そんな、だって、ほんとに…

「ごめんなさい、詳しいことは言えないの。まだ、時間も経っていないから」

最後の砦を、その言葉が簡単に壊した。

信じられないのではなく、これが真実なのだ。

受け入れた途端、出てきたのは耐えられないほどの後悔だった。

「お、オレ…何も、して、やれな…かった！」

大粒の涙が、止めようとしても止まらない。

どんなに堪えようと、涙が勝手に、溢れてきた。

「タケマサさん…」

桜を、一緒に見てやることすら出来なくなった。

何一つ、アヤメにしてやれなかった。

金がないから、彼女の好きな菓子詰めを買わなかった。

言い訳して、アヤメの好きなものを買ってやれなかった。

それが、ただの、オレの、赤いマフラーで。
何より、誕生日おめでとうすら、言ってない。
何も、出来なかった。

「オレ、バカだ…」

とてつもないバカだ。

「こんな事になるなら、アヤメに言っただった…」

素直に。好き、と。

ただそれだけの、たった一言を。

「…知っていますか？タケマサさん。昨日、イツキさんがあげた一輪のあやめの意味を」

鼻をすする。

「？」

「あやめの花言葉、あなたに、託した言葉です」

男の俺が花言葉など知るわけもなく、ただフルフルと首を横に振った。

ミユキさんの言葉を理解するのに精一杯だった。

「真実の愛、です」

そう、言った。

「聞こえません」

「……………タケマサさん」

聞こえねえ、ともう一度大きな声で、怒鳴る。

頭で理解するのが怖い。ミユキさんの言葉を聴きたくもなかった。

「彼女は、あなたが好きだったのですよ」

「違う！」

妙に早く反論できた自分に、自分自身驚いた。

彼女は、俺を好きになるわけがない。好きになったはずがない。それだけは違う。

なぜなら、俺が、彼女を好きになっていたのだから。

だから、好きだったのは俺だ。

「オレなんだ…」

「？」

「好きだったのは！オレの方だったんだッ！！」

空しく、病室に怒鳴り声が、響きわたった。

その思いすらも、残らず、消えていく。

「でも！オレは、何もしてやれなかった！桜と一緒に見ることも！彼女の好きなものすらあげられなかった！まだ、誕生日おめでとう

も言っていない！」

「……………」

「…何より、好きって言ってる事も出来なかったッ！」

出来るなら、最後に、逢いたかった。

最後に別れの言葉を言わせて欲しかった。

たった一言でも良いから。

もし、魔法が使えるなら、今すぐ時間を戻してしまいたい。

もし、願い事が叶うなら、サヨナラを言いたい。

でも、出来ない。そんな夢みたくない事は出来ないのだ。

それを見てか、ミュキさんはポケットから何かを取り出して見せた。

「これを」

差し出されたのは、茶色の封筒だった。

涙を拭って、その封筒を確かめる。

表書きには、慎ちゃんへ、と書かれてあった。

「こ、れは？」

「彼女から、預かったあなたへの手紙です。開けてみてください」

封筒の中には、一枚の紙が入っていた。

そこには、たった一行だけ、彼女の字で書いてあった。

『忘れない、あなたと過ごした短い春。好きだよ、慎ちゃん』
と。

それだけ書いてあった。

俺はそれを見て、自分の思いを抱いて、無様に泣いた。

「俺も、忘れ……ない……」

と、それだけ言うのが精一杯だった。

END

0、春の一日は終わり、桜は咲く前に散った（後書き）

あやめ、一輪。枯れたまま、花瓶に残されたまま。

いる。

生きて

【春二、出会いは春一番の悪戯だった】一幕、出会いは春一番の悪戯だった（前

春は出会いの季節でもあり、別れの季節でもある。

【春二、出会いは春一番の悪戯だった】一幕、出会いは春一番の悪戯だった

太陽が、ビルの片隅から顔を覗かせ、こつちを見ていた。

もう空は赤く染まっている。紅色の雲、ちらちらと夕日が、光る。オオミヤソニックシティ、下の広場。

そこは、オオミヤソニックシティを出て、すぐ近くにある階段を下りる。その目の前にあるのが、その広場。この場所はオオミヤソニックの一階の出入り口が大きく口を開けていた。

日が傾いたせいか、ビルの陰が夕陽によって当たり一面を暗くさせている。

冷たい風。ビルの間をぬって時折、吹いていた。

「砂上の楼閣の上に立つ二人の女の子は、お互いの姿をどう瞳に映すのか？」

そう言って、アライハルカはぱたり、と読んでいた本を閉じて視線を上に向けた。

その表情は、少し寂しくも見える。

もう高校三年生で、あと一ヶ月もしないうちに、最後の卒業式がある。

ハルカにとつて、高校生活が充実していたかと聞かれたら、上手く答えられる自信がなかった。仲が良い友達もいない。といって、別にクラスから嫌われているわけでもない。

本当に平凡な、同じ毎日を繰り返し返していた。

それが、辛いと思っているわけでもない。ただの同じ日だと思っ込むだけ。

「……」

空は赤い。

ハルカは学校の帰り道に、必ずこの広場コウに寄る。そして道路から外れた静かなところで、階段の段差に座り、気ままに本を読む。

それに意味があるわけではない。

ただ、日が暮れるまで、そうやっていた。

同じ年代の人は、近くで遊んで笑っているのも知っていた。だからだ。

「…同じように、私も」

ハルカは階段から立ち上がり、スカートの汚れをはたく。左手には本を抱えながら、右手で、ぎこちがなさそうに、ぱたぱたと。

ハルカはこの場所が好きだ。

ちょうど風の通り道になっていて、ビルの間隙から身を震わせる風が吹く。だからか、あまり人も来ない。ここから少し歩けば、休むにはちょうどよい公園もあるからだ。

そこの方が、ここよりずっと子供がいて元気に遊んでいた。

人がいる公園よりも、人が少ないこの広場の方が、本を読むのに適していたのもある。寒ささえ我慢すれば静かでいい場所だった。

というよりは、ハルカにとって人間付き合いは少し苦手だった。

それを直したいと思ったこともある。

それが自分のネックだというのも薄々認めていた。認めるしかなかった。

(こんなところ、誰も来ないよね……)

その時、強い一陣の春一番が吹いた。

「あっ!!」

持っていた本と、自分の持っていた袋を驚いて放してしまい、袋から幾つかの本が階段を勢いよく転がっていく。

それを取ろうとして、体の重心を崩し、ハルカはよろけた。

「……」

こけた先、ハルカは痛そうに足をさすりながら、自分の前に誰かいるのに気付いた。

上を向いて、確かめてみると、それは女子高生だった。こんなところにいるようには思えない外見。それはハルカよりも、もっと。

(わるっぽい)

それがハルカの彼女に対しての第一印象だった。

その姿は、茶髪のボブ、肩口で切りそろえられていた。さらに化粧も、小奇麗にそれもいやみたらしく、つけているのではなく、あくまで美しかった。

スカートも、短い。もちろんハルカと比べれば、月と鼈の差がある。ルーズソックスも履いて典型的な女子高生に見えた。

ただ、異質だったのは彼女の口にあった煙草だけ。それが悪の象徴でもあるかのように、異彩を放っていた。

「あ」

ハルカは突如、顔をその子から背け、恥ずかしそうに、はにかみ、散らばった本を拾おうとする。顔が真っ赤になってしまった。

「ちッ」

「え？」

それを見た、女がぶつきらばうに口を鳴らし、屈んだ。

呆然と、その姿をハルカは眼で追っていた。

その女の手が、ハルカの落とした本に触れ、掴み、そして無造作にハルカの方につき返してきた。

「え？」

それも一冊だけ。

他にも散らばっているのにもかかわらず、その一冊のみ。ハルカにつき返した。

「……」

まるで、とつとと取れと言ってるような目つきだった。

睨む眼を尻目に、ハルカはそれをおずおずと受け取った。

「あ、ありがとう」

「アンタ、その制服、オオ校？」

品定めされているようにジロジロ見られて、ようやくハルカも相手の女の姿をしっかりと見ることが出来た。雰囲気や態度を見る限り、怖く見えたが、ハルカにはどうしてかそう思えなかった。

根拠はない。ただ、一つ言えば彼女の瞳の吸い込まれそうな黒になにかそう言った怖さではない何かがあるように思えた。

そして気付く。その女の制服にも、ハルカと同じ「なでしこ」の文様が記された襟章があることに。

「それ、あなたもオオ校なの？」

驚いたような表情をしてハルカが指差した先のそのマーク。

それは、まさしく同じ高校、オオミヤ高等学校の襟章だった。

オオミヤ高校には珍しく、校章が二つあった。男子には「やまぼろし」をデザインしたもの、女子には「なでしこ」をデザインしたものが、襟章になっている。

その二つが混在した、珍しい高校だった。

「アンタ、どっかで見たことがある……」

「え？」

ぐっと顔を近づけてハルカの顔を見られた。口の端にある煙草の煙が、ハルカの顔にかかる。

「アンタ、関のクラスだろ？私と同じ」

「！」

そう言われてハルカの頭の片隅に現れたのは、オオ校一の不良女子高生。

煙草を口に咥え、言葉遣いは悪く、髪は茶髪。なによりも授業のサボり癖が凄いため教師の間でも噂になっていた女の子だ。

「ヨコカワカヨ……」

「ちッ、なんだよ、知ってるのかよ」

ぶつきらぼうに顔を背け、煙草を口から離し、煙を寒空の上に向けて吐く。

ヨコカワカヨ。それが、不良女子高生というあだ名ネームの真名。

ぷはーと吐かれた白い煙が、あっという間に見えなくなった。

相手の名前を自分だけ知っているのに少し罪悪を感じて、ハルカは自己紹介した。

「私はアライハルカ」

「聞いてねえよ」

ハルカの顔を見ずに、即答で否定された。

「ごめん…」

「謝るんじゃないよ」

ならどうしたらいいのか。

ハルカには何が言いたいのかわからないまま、自己嫌悪に落ち込む。

「んで、学年一の秀才が何やってんだよ」

「へ？」

「だから、がり勉のあんたがなにやってんだよ」

一瞬の間があった。

「なんで、知ってるの？」

「知ってるも何も。アンタ、アライハルカなんだろ？有名じゃん」

キツと睨まれ、ハルカの体が硬直した。

自分のあだ名を知ってくれていた驚きとその鋭い目に、カヨの視線が外されるその瞬間まで、電池が切れたように体が動かなかつた。その動かない体を、ハルカのどこかにある黒い感情が奮い立たせた。

「……有名じゃない」

ぼそつと、口から出ていた。

ハルカの口から影がさしたように、何かを否定する。

「有名じゃない！」

もう一度。

「？」

「有名なんかじゃない！！」

最後にもう一度。より強く。

「……あ、そう」

「は？」

今度は、ぷいとハルカに背を向けて、前に歩いていく。そして煙草を放り投げ、ギョツとカヨは踏み潰した。

「かんけーねー」

「……………」

苦し紛れの一言なのか。

興味がただ無いだけなのか。

それとも他の理由なのか。

カヨはハルカの方を振り向かず、背を向けたまま、踏み消したはずの煙草を、まだ踏み潰し続けている。

「んで、アンタ何やってんの？こんな寒い所で」

まだ二月の一週目、木曜日。冷たさはまだスカートから出る足に感覚が無いほどの辛さを与えていた。

「本…読んでた」

「バカか？」

即答。

「ッ……………」

「なんでこんな寒い所で。しかもなんで読書なんてしてるんだよ？」

その答えを一瞬、口から漏れ出しそうになって、ハルカはあわてて開けかけた口を閉じた。

「……いいじゃない、なんでも。ここが好きだから、いるの」

また、バカにされそうになるのではないかと身を強張らせて待っていたが、カヨの答えはハルカが想像していたものとは大きく違った。

「んー。ま、確かにいい場所…だな」

ヨコカワカヨはこちらの方を向いて笑ってそう言った。

2

同じクラスだから。

その事実が、アライハルカにとてつもない勇気を振り絞らせた。出会いから、まだ一日たっただけ。

昨日のことについて、ちょっとだけ話したいと思った。

ザワザワと話し声が飛び交う中で、ハルカは決心した。

休み時間、アライハルカは思い切って、ヨコカワカヨの席までいき、話しかけてみた。

「こんにちは、昨日は……」

ありがとう、と。言おうと思っていた。

だがそれを聞かず、ヨコカワカヨは席を立った。

精一杯の勇気を振り絞ったはずだったのに、カヨはハルカを視界に入れることなく、その横を通り過ぎた。

まるで、そこには誰もいないみたいに。

はっと息を吸ったまま、その通り過ぎる姿を目で追い、適わない
思いが自分の手のひらから、離れていく。

クラスメートに視線が、ちくちくとハルカの体に突き刺さる。

カヨは、ハルカを無視したのだ。

あの時と一緒にだ（・・・・・・）。

自分の甘さをまた知って、心が沈んだ。

昨日逢っただけ。

それだけの関係でしかない。確かにそれだけだ。

でも、アライハルカにとって、また学校で話しかけてもらいたか
った。

昨日のことがきっかけで、例えそれが不良女子高生でも仲良くな
れるのではないかと、思っていた。

そうなってほしいと、信じた。

ハルカの思い込みだ。

「バカだ、私……」

また勝手にそう思って、と心の中で一言。

俯いたまま自分の席に戻るため、クラスメートの席を避けながら
戻った。

ハルカの周りには、まだ親しい友達はいない。

3

今日は最低の一日だったと、ハルカは思った。

必ず努力は報われると、頑張った分必ず報われると、そう信じて
いたが、やはり救いなんてない。

オオミヤソニツクシティの広場へ通ずる階段。
読みかけの本をバッグの中から取り出しながら、周りを見渡した。
日も傾き始めて、もう少ししたら空も赤く染まり始める。
まだ二月にしては寒い陽気。太陽の光は暖かい日差しが射すが、
マフラーは手放せなかった。
またアライハルカの1人の時間が始まる。

「……ふー」

何かの吐く音が聞こえ、ハルカの注意がそつちに向いた。

「ヨコカワカヨ？」

そこには、なぜか彼女がいた。
オオ高一の不良女子高生が。

煙草を吸いながら、白い煙を吐き出して階段の一番下の段差に座
っている。

そこはハルカの特等席だ。

ハルカはカヨの近くまで歩み寄り、声をかけた。

「どうして、あなたがここにいるの？」

「いちゃいけねーのかよ」

また即答。

「ここ、私の場所なんだけど？」

「アンタの持ちもんかよ？」

けたけた、と笑ってハルカを拒絶した少女は憎まれ口を利いた。

「ん？」

ハルカはマフラーを握り締め、本を落とした。それを拾おうとはしなかった。

「本、落としたぞー」

「なんでよ……」

ふるふると、ハルカの体が小刻みに震えていく。まるで、感情が制御できなくなってしまうた壊れた人形。

「なんで！」

泣いていた。

ハルカが、泣いていた。

「う、う、……」

拒絶されたのに。

否定されたのに。

なのに、なぜそこにそれをした本人がいる。

何のため？

どうして？

証明不可能のパラドックスみたいに複雑に絡みつく。

「なんで……」

無視したの？その言葉を必死に飲み込む。
言っではいけない。

それは聞いてはいけない質問だ、というのも薄々わかっている。

「なんで…」

「あのなら…ここ、アンタより、先にみつけのは私だ」

と、意味不明な言葉が返ってきた。

「ここ、煙草吸うのにいいだけ。だれにもみつかんねーからな。気のままに吸える」

ヘビースモーカーか。

「……」

鼻をすすりながら、カヨを見つめる。

「立ってねーで座れよ。ここがいいんだろ？」

ぼんぼんと、カヨは自分の横の段差を叩いた。

「え、…うん」

促されるように、カヨの隣に座る。

その前にバッグからハンカチを取り出して、段差にしく。
それからスカートが皺にならないように座った。

「汚れてもいいじゃん、んなに気にしなくたって？」

「……習慣なだけ」

「は？」

「いつもそうしてるから、そうしてるだけ」

カヨは首を傾げて、ふーと煙を吐いた。

煙は、息と変わらず白いまま消えていく。

「いみわかんねー」

ハルカはそのまま膝を抱えながら、顔を膝にくっつけた。マフラーが地面についてしまっている。

「本、読まねーのかよ？」

「だめ？」

「ん、だめじゃねーけど」

恥ずかしそうに、はにかみながらカヨは頬を掻いていた。少し顔が赤くなっているようにも見える。

「言っとくけど、無視したわけじゃねーから」

急にカヨが切り出した。

「は？」

振り向いて、カヨを見つめる。

「アンタと私じゃ、釣り合いが取れてねー。アンタとじゃ、あわねーだろ？学年一の秀才と不良女子高生じゃ」

「……」

それは、ハルカのことを心配してそうだったのか？

(私の評判が落ちないように？)

もし、話していたら、学校の先生からも目をつけられることもありうる。

恐喝、とかいじめられているとか。

そんな根も葉もない噂も、噂好きの女子クラスならわからない。ぼいっとまた煙草を前に放り投げていた。

「そんだけ。じゃ」

そう言って、カヨは立ち上がる。

皺になったスカートも気にせず、少しだけはたいて、階段を上っていく。

「待って」

「ん？」

カヨの白いマフラーが揺れた。

「また、ここに来る？」

「なんで」

「あ、その… また話せるかな？」

ハルカの視線が泳ぐ。

まるで可愛らしい子犬のように。

「いかねー」

「……」

即答。

「だけど、煙草は吸いに来る。言っただろ？ここは私の場所だって」

そっぴい残して、カヨはオオミヤソニックを後にして帰っていった。

残されたのは、煙に包まれたハルカ。

結局来るのか来ないのか、良く理解できないまま、たちつくすことしか出来なかった。

春にはまだ寒いビル風が容赦なく吹き付けてきた。

考えても仕方ない。

アライハルカは本も読まず、ヨコカワカヨが帰っていった階段を上る。

律儀なことに、ハルカはカヨが放り投げた煙草の火をちゃんと消すために、もう一度オオミヤソニックの広場に戻ってきて、吸殻を踏み潰してから帰った。

二幕、春は必ず冬の後巡る

二月二週目の木曜日

二月の二週目、木曜。学校登校日。

学校でただ事実確認と進学決定の通知を報告するだけで、すぐに解散となった。アライハルカはもうすでに大学は決まっていたので、来る意味はない。

ただ、カヨが来ているのでは、と思い登校してみたが、カヨは欠席していた。担任の先生が大事なときに来ない、と怒りを露にしていたが、カヨの性格を知っているからか、その矛先は すぐに収まった。

ハルカが学校を終えて、向かった場所はもちろんオオミヤソニックシティ。

時刻はお昼を過ぎて、一時を過ぎたところ。

オオ校から歩いてすぐのバス停で大宮行きバスに乗り、JR大宮駅（東口）3番バス乗り場に着く。

オオミヤソニックシティは大宮駅西口、とここから逆方向にある。空は快晴。眩しい光が日向と日陰を色濃く分けていた。温かみある日差しが、寒い陽気では感じられない。

ハルカは、雑踏を分けながら、人の奏でる音を耳に残しながら、人を避けていく。

同じ学校の学生。違う学校の学生。主婦。子供。老人。人。

その行きかう姿を一瞬目に止めながら、気持ちは沈む。

駅の中は外よりも騒がしかった。学生よりもスーツを着たサラリーマンがハルカの前をたくさん行き来している。

駅の臨時アナウンスが、JRサイキョウ線の遅れを教えていた。その放送を誰も聞いていないように、行き来する人が急ぐ。

その姿が何だか滑稽に思えた。

冷え切った体を、駅の空調がゆっくりと温めてくれていた。

周りは人。

周りは人だらけ。

（私の周りは？）

通り過ぎ行く人だけ。

誰もいない。

少し模索してみたが、そこではっきりと現れる人は、少なからずハルカにはいなかった。それでも少しは、ともう少し考えを巡らせ
てみる。

その中でハルカの脳裏に浮かんだのは、才校一の不良女子高生。

煙草を口に啜えた、口の悪い同じクラスの子。

「カヨ」

思わずハルカの口からその名が漏れていた。

図々しくも名前だけ呼んでみて、すぐその邪な考えを打ち消す。

そんなことは考えてはいけない。

なぜ彼女の名前が不意に出たのかは知らない。友達でもない。ただの同じクラスの関係でしかない。

もちろん目の前にヨコカワカヨはいない。いたら、恥ずかしくて
言えるはずもない。

ハルカはやつとたどり着いたオオミヤソニックの階段をゆっくり
下りていた。

バッグからカバーのかかった小説を取り出し、階段の一番下に向
かう。

オオミヤソニックの広場には誰一人いない。いるはずがない。こ
の時間にいるのはハルカだけ、だったはず。

階段、一番下の段差。ハルカの特等席。

そこにいたのは煙草を吹かしている女。

ヨコカワカヨがそこにいた。

「……ヨコカワさん？」

持っていた本をまたもや落としそうになり、ハルカはカヨの方に近寄ってみた。

首だけをこっちに向けて、ダルそうな声で舌うちをされた。

「チツ…、おー」

まるでやる気の無いような声、それに加えて気分を邪魔されたような雰囲気。

「学校は？」

それを敢えて無視して今日欠席した理由を聞いてみた。その雰囲気について何か聞いてもまた馬鹿にされるに決まっている。

「途中まで来たんだけど、面倒くさくなって、ヤメタ」

とんでもない言い分。まるで小さな子供が何かに飽きてすぐに放り出してしまう性分。

「学校に行かないの？」

「行く気がねー」

即答、そして口から煙を吐いた。

「何してたの？」

「アンタ、私の何？」

こつちをギロリと睨み、鋭い眼光でハルカを射抜いていた。

「え？」

「アンタに何か言われる筋合いは無い」

否定。迷惑。

「あ……、ごめ、ん」

気分が低落しながらも、きちんと謝ることは忘れない。カヨを見ていれなくなって、わざと視線をはずした。

「ふー、友達と屯たむろってた」

突然の切り出し。

「え？」振り向いて、カヨの顔を見つめ直す。

「だから、友達とアルシエに行つて遊んだ。んで、お腹減ったからマック食つて、ここで一服してただけ」

アルシエ。オオミヤ駅西口からすぐ出た目の前にあるファッションビルのことだ。

オオ校のみならず、他の女子高生がよく服やアクセサリーを見に行く、と聞いた事がある。

もちろん、ハルカはその存在を知っていても行ったことは無い。

「煙草吸って、一服？」

「そー」

ぶはーとカヨの口から吐き出された煙はくるくると空気と混ざり合って、見えなくなる。

ハルカは自分の携帯電話をさりげなく確認。時刻は二時半。

昼から一休みしていたには、ちよつと長すぎて不自然だった。

確かに、途中まで来て面倒くさくなつて、友達と遊び、昼飯を一緒に食べたのだろう。

だがそれ以外に、何かがあつてカヨはここにいる。

わざわざ一時間以上も煙草を吸いながら時間を潰して。

カヨの足元にはすでに幾つもの煙草の吸殻があつた。丁寧に吸っていないのか、途中で消したものばかりが目立つ。

一体何のために？

「なー、関どーだった？」

「あ、先生怒つてたよ、すごく」

突然ケタケタ笑い出すカヨ。

「あいつ、いつもそーなんだよな。まるで見下したような目で私を見るし。何が、学校に出て来い、だ。そーやって強制すれば自分の役割は終わったと思つてやがる」

一瞬の乾いたカヨの目。ケタケタ笑う声もだんだん小さくなり、虚空の向こうに消え、残つたのは近くで聞こえる車の通過音。

カヨの深い黒い目が、地面を見据えたまま、止まる。

「いつもそーなんだ。そーやって何になるんだろ？」

「……」

まるで自問自答するような問いに、ハルカは戸惑ってしまい口を閉ざした。

二人の間に無言のときが流れる。
はつきりいつてきまらずい。

「それ……」

「え？」

カヨの視線の先にあったもの。ハルカの本。
取り出しておいて、カヨと話す事に夢中になり、読む事すら忘れたもの。

「今までにどれくらい読んだ？」

「えっと、100冊ぐらいは……」

「マンガを？」

「ち、違うよ。マンガも見るけど小説」

右手でぶんぶんと手を振って、慌てて否定した。
もちろん漫画も見るが、だいたいは文字を追う小説を読む事が多かった。

カヨは興味がなさそうな顔でこっちを見ている。

「何かおもしろーの？」

「えっと……小説ってね、現実ではありえない事を体験できるから。きつと本人が望んでも出来ないことや、有り得ないって思うことも物語ではリアルになるの。」

面白いでしょ？

その中では私も誰もが、主人公になれるから、好きなの」

嘘だった。

それが全て真実であつたとしても、実際はそう思い込む前にハルカには本を好きになつたある理由があつた。

「きつと、人間が小説を読むのは、何かを求めているから。誰もが、自分の望みを欲し、現実とは違う幻想ものがたりに浸りたいから」

「……バカか」

即答。

「えっ？」

「んなの、聞いてねーよ。今までで読んだ本で、一番何かおもしろーって聞いたんだよ」

顔が真っ赤に熱くなるのがわかった。巻いてあつた赤いマフラーを口元に近づけて顔を隠す。

「あ……その。えっと春のお話を纏めた小説で、有名な映画のキャッチフレーズをパクった題名の本」

「なんだそれ？」

「うーん、上手く説明できないよ」

「あつそ。ならいい」

ぽいとハルカから視線をそらし、前方に見える広場の横を通る道を見つめた。

少し気ますぐなつて、手にあつた本を弄つてカヨに声をかけた。

「あ、あの」

「何」

「今度よければ、それを持ってくるよ。どんな本か教えたいし……」

「いらねー」

即答。それと同時に、ぽいとカヨは煙草を投げ捨てる。

捨てた煙草が弧状を描き、落下。地面に落ちても火は消えない。

「私、本嫌いだし。それに迷惑。そんな気分じゃねー」

本が好きか尋ねられたからこそ、丁寧に答えたはずだった。

その気遣いすらカヨにとってはどうでもいらしい。ただ少し前の沈黙が耐え切れなくなつてそんな話題を振つたように思えた。そんなカヨに少し呆然とした。

カヨが立ち上がつて、自分の黒いバックを手にする。

「帰る。じゃーな」

「でも、絶対好きになるよ?」

カヨがこつちを振り向いて一瞬沈黙。そして何かを諦めたかのような顔をして、階段を上っていく。

「チツ、好きにしるよ」

それだけを言い残して。

時刻は三時。いつのまにか時計の針は進んでいた。きつとこうやって安心して誰かと話したのは何年ぶりだったろう。ヨコカワカヨといつのまにか、まるで友達のように話せていた、気がした。

【ハルカの淡い期待】

アライハルカには期待があった。

中学生の頃からハルカの周りには友達がいた。今とは違い、休み時間を一緒に楽しく過ごせる仲間が。友達が。

その中でハルカが一番好きだったのが幼馴染だ。

幼馴染は、ハルカのことを良く気遣い、自分をたてずに、親友をたててくれた。そのせいかもしれない。それが少しだけ、ハルカに自信を与えていた。

少なくとも社交性に秀でていなくても、友達を作れる力を持っていると過信していた。

小学校、中学校とは違い、このオオミヤ高校に行くのはハルカし

かいなかった。

オオミヤ高校が、県内一の進学校だったのもある。住んでいる家の近場が良かったのもある。ハル力は、幸いにも勉強はできた。

だから、幼稚園から一緒だった幼馴染とは、ついに高校で別れる事になった。

中学校を卒業するとき、幼馴染は一人だけ違う高校へ行くハル力を気遣った。

『大丈夫、ハル力なら平気よ』

その言葉が、ハル力にとてつもない力を与えたに違いない。

だから、ハル力はこう言った。

「私が強くなつて、安心させてあげる」

唯一、幼馴染への恩返しだとハル力は思った。それがいつもハル力を第一に考え、心配し、気遣つて、そしてハル力を笑わせてくれた幼馴染への恩返しだと思った。

幼馴染は、それを心配そうに笑ってくれた。

2

高校一年、春の入学式。

人が余りにもたくさんいて、正門前は人で混雑していた。

淡い期待と、自信を持ちながらハル力はその入学式に出席。

そのとき席が隣だった人とも何回か話せることには成功した。

それだけで、ハル力はうれしくて仕方なかった。話しかける前は、緊張で汗が出たが、話しかけると、心の荷が下りて、脱力しそうに

なり、倒れそうになった。

さらに淡い希望も抱き始めていた。

オオミヤ高校なら、私も安心して学校生活を送れる、とそう思った。その先にあるのは、友達ができそうという嬉しさと「すごいでしょ」と自慢して幼馴染を安心させてあげられる充足感が心を震わせていた。

クラスに戻ったとき、残念ながら入学式で隣だった人は席が離れていた。

周りは知らない女の子ばかりで、ハルカの周り、四方でその席の隣の人たちと談笑していた。それを見てハルカは、周りの人に話しかけるタイミングを失ってしまった。話し合っている人たちが、ハルカが話しかけた瞬間、嫌な顔をされるのが怖かった。話しかけるといふ決意がまるで宙から落とされたように、急速にハルカの中で萎んでいった。

ハルカを満たしていたのは、不安・疑念・恐怖。

仕方なく、その日は受身で、話しかけられる時だけをハルカは長い時間待つことになった。

そして結局、その日話せたのは、入学式で隣だった人だけになってしまった。

それが一年最後まで響くことになる。

入学式で隣だった人と、ハルカの周りの席に座っていた人たちとも仲良くなる機会がないまま、一年生の終わりを迎えてしまった。

もちろん、嫌われてるわけでもなく、はぶられているのもなく、話しかけられれば、会話し、仲良くなったように見えるが、実際は違った。

表面上の関係に過ぎなかった。

すでに、クラスの中で集団の仲間の領域が線分けされつつあった。見えない領域がハルカとクラスメートの間にあって、まるで触れることができない壁みたいな感じを与えていた。

そのときから、ハルカは休み時間には、話しかけられることも、

やることもないので、本を読むことが多くなっていた。

間違いなく、ハルカは仲良くなる機会を、最初の一日で逃してしまった。
チャンス

3

高校二年生、始まりの日。

ハルカはまだ淡い期待をもっていた。

クラス替えが行われ、まだハルカ自身にも機会が残っている。でも心の奥では、どこか拭いきれない不安が蠢いていた。

一年生の一年間がハルカを悩ませ、幼馴染の期待を裏切ってしまったのが嫌だった。

今度こそその予想とは裏腹に、ハルカは友達を作るきっかけを逃さずに手につかむことに成功した。

「おはよう」

と、前もって決めていたフレーズを隣の人に話しかけ、向こうも怯えながらもちゃんと挨拶をし返してくれた。

そして、そのまま話を切らせないように続けて今日のスケジュールを聞いた。

話も何とかかみ合い、その人と仲良くなることができた。このままこの関係が続けていけば、その先の期待、希望をつかむことができるのは間違いない。

それも、仲間の絆で打ち砕かれた。

二年生ともなれば、一年生から親しくしている友達がいて当然だ。仲良くなった人には一年生のころ親しくしていた友達のグループ

があつた。ただそれだけで、ハルカには話の輪に入れないときが多
数存在し、一緒に話すことが難しくなつたように思えた。

嫌われたわけではない。ただ、その一年生から作り上げた絆が、
ハルカにとってうんも言わせない、入りにくい雰囲気醸し出して
いた。

普通の人ならそこで、強引に割り込む方法も選択肢にあつたかも
しれない。話しかけるにも。ハルカにはそれが積極的にできなかつ
た。

自らそれを避けるように、ハルカは話しかける回数を減らしてし
まった。自分ではそこにもう入れない、と思ひ込むようになり、自
分の殻に籠るようになってしまった。

そして回数を重ねるごとに、その仲良くなつた人と話すことやふ
れあいは少なくなつていき、その人とハルカの関係は遠くなつてい
つたのだ。

関係が深くなつたのは、一年生から続けていた読書だけ。それが
ハルカにとって唯一の気休めの行為となつた。

本を読むと行為が、習慣となり、休み時間は黙々とただ乾いた本
のページをめくつた。

外界からの楽しそうな声から逃げるように、本に集中した。

そこから、ハルカは文学系少女としてみられ、クラスメートはそ
の近寄りがたい雰囲気から、ハルカの読書をあまり邪魔しなくなつ
た。

しかも話しかけられる時は、いつも勉強・宿題に関することだけ
となり、友達や仲間と話し合い、笑いあふ関係とはかけ離れた関係
になつてしまった。

仲良くなるにも、さらに困難になつていたことに初めてハルカは
気づいた。

それでも休み時間に読書をやめる事はなかつた。やめてもハルカ
には仲良くなれる機会がもうあるとは思えなかつたから。

後はもう、一年生の最後と結末はなんら変わらない。

そして高校三年生、高校最後の学年。女子高生でいられる最後の年。

ハルカは、もう期待はしていなかった。

文学系少女。がり勉。学年の秀才。

そんなあだ名ネームはハルカにとって味気のないものになっていた。

ハルカにとって欲しい物は、そんなものではなく、もっと暖かい、
絆。

あれから二年たったせいで、クラス的にハルカの入れる隙間はどこにも空いてなかった。

案の定、もうそんな希望と出会いはなくなっていた。

嫌われているのではなく、人気があるわけでもなく、このクラスにハルカを認めてくれる人はもう幻のように夢見事。

ハルカは今更になって、それを悔やんでいる。

今という現実でどうして話せないのかを悔やむなら、その前の二年生のころを悔やんだ。どうしてあの時、グループに積極的に入らなかったのか、どうしてもっと早くそれに気づかなかったのか、とそれを悔やむとさらにその前に遡り、ハルカを苦しめる。

一つ前を悔やむとその前の出来事を遡り、悔やんだ。それを悔やむとその前の前に遡って悔やむという繰り返し。

悔やむ悔やむ悔やむ悔やむ……

その繰り返し。その繰り返しから出た結論は無残な疑問。

どうして私はここにいるのか？

という、最終的な疑問。事実。

ハルカはそれに答えることができない。

その疑問はハルカの奥底にある笑うという感情を厭らしく蝕んだ。どんなことを言っても、楽しくならなかった。笑えなかった。

なぜなら、ハルカにはその楽しい、笑うという感情を互いに伝える相手がいなかったから。

何かを憎む、より悔やむ。それも相手よりも自身を。それがハルカの傷だった。

幼馴染から言われたこと、そして今まで生きてきて、幼稚園から中学校まで友達がいたこと。その理由が否応なしにわかってしまった。

あの幼馴染がいたからこそ、ハルカは笑っていられたことを知ってしまった。

あの幼馴染が、ハルカの近くで支えてくれたから。

あの幼馴染が、自分よりもハルカを立ててくれたから。

あの幼馴染が、ハルカを大切にくれたから。

だからこそ、ハルカの周りに友達が集まったのだ。

だからこそ、幼稚園から中学校までハルカにとって楽しい生活が続いたのだと。そう認めさせられた。

（私、馬鹿だ）

悔やんでも、もう遅い。

失われた時間が戻ることなんてない。無かったことにすらできない。

もう、ハルカは笑わない。

あの幼馴染へ、どんな言い訳ができるというのか、どんなことを

言えば顔向けできるのか、それがわからなかった。

今頃、自分の弱さに気づき、それがどうしようもない所まできても、ハルカにとってそれを語る相手すらいらない。
いないのだ。

幼馴染の気遣いが今になってありがたく感じた。

「私は頼ってた。ずっと、ずっと。それすら気づかずに、私は笑ってた」

それが三年も経って、やっと気付けたことだった。

6

しかしそれが変わった。

ヨコカワカヨと出逢ったことで。

オオミヤソニツクシテイでしか話さない関係でも、ハルカにとってそれは信じられない出来事だった。カヨは不貞腐れたふてような面持ちで、ハルカの話聞いてくれる。

「聞きたくない」という雰囲気を見て取れる態度をしているが、実際よく話を聞いてくれていた。

それがハルカにとって、この三年間で一番嬉しいことになった。
話す相手がいる。

それがただ、「うん、うん」と聞いてくれるだけの関係でも、それがただ、オオミヤソニツクシテイの広場だけの関係でも、それだけで充分だった。

それだけで、ハルカの気分はずいぶん軽くなった。

カヨとハルカは大きく違う。性格も、格好も、態度も。

それでもハルカはカヨに共通している何かを見出していた。

友達とはこういうものなのかな、と思った。

だが、それもカヨによって振られてしまったが、ハルカは辛くも悲しくもなかった。

なぜなら、そう拒絶されても、カヨはオオミヤソニックに律儀にきて、ハルカとの関係が続けたからだ。

だからハルカも信じている。カヨもハルカのことを気に入っている。

「信じていたい」

三幕、花は冬の中でも生きている

二月三週目の木曜日、卒業式まで二週間をすでに切っていた。

ハルカとカヨの関係は、オオミヤソニックシティでのみ続けられていた。学校では目があっても何も話さず、すれ違った。

それがなぜだかわからない。

気付いていたら、カヨとの関係はオオミヤソニックシティのみで続いていた。

カヨもそれを承知しているのか、決まってオオミヤソニック広場の階段、一番下の段差で煙草を吸って待っていた。

まるで、それが当たり前のように。

「こんにちは、ヨコカワさん」

「……」

無視。煙草の煙が漂う。

「あの、ヨコカワさん？」

「……うるさい」

拒絶。

カヨの隣に座る。もう隣に座ることに緊張はしなくなっていた。

カヨの顔を見ると、浮かないような表情をして煙草を啜えている。

「何かあったの？」

「……………」

無視。こっちの顔を見もしない。

「ヨコカワさん？」

「……………」

またも無視。

いつもなら挨拶ぐらいしてくれるはず。もちろん憎まれ口も叩きながら。そうやって、アライハル力をいつも受け入れてくれていた。

「仲の良かった友達が、私のこと嫌いだってさ。もうゼツコーだつて」

「え？」

突然ケタケタと淋しそうに笑うカヨ。

自分に言い聞かせるように、少しずつカヨは話し始めた。

「私、これでも友達は嫌いじゃねーけど、やっぱり、つれー。すれ違ったのは、本当に些細なことだけど、ここまで悪くなるなんて思ってたなかった」

「……………」

「ガッコーじゃ私にはあまり友達はいねー。だけどその仲の良かった友達と喧嘩するってのはやっぱり辛いわー」

自らを苦笑しながら、そう言い訳をしていた。

「なんで泣かないの？」

「あ？」

即答ではない、一瞬の間がそこにはあった。明らかに不機嫌なイントネーションで答え、じろりと睨まれた。

「聞いたから。私が、その人から」

「！」

驚いた顔でこっちをみるカヨに、バツが悪くなって少しだけ視線を逸らす。

「ヨコカワさんが何でそんな風になったのか、聞かせてくれた。その友達だって、赦してくれるって」

「黙れ……」

「ヨコカワさん、もしかして……」

「黙れえッ！……！」

怒号。途中まで口に出していた言葉が打ち消された。

「……………」

アライハルカが疑問に思ったのは今日の登校日、HRの時だった。カヨの久しぶりの登校にハルカは嬉しかったが、同時にそのつれ

ない、沈んでいる顔に不思議に思った。

いつもカヨはその外見からか、学校でもあまり評判の良くない人たちと馴れ合っている。もちろんそれはその人たちが悪い、と言う意味ではない。カヨの周りにいるというだけで悪いと思われるしまった。カヨにとってもそれはかけがえのない友達だった。心の赦せる友達だったのかもしれない。

なのに、その友達がカヨの周りにいなかった。誰一人も。

カヨは来てすぐに、荷物を置いて自分の机で寝てしまった。

外界から遮断するように、自分の机に突っ伏してカヨは時間を潰していたに違いない。その姿は自分に少しだけ似ていたように思えた。

ハルカは、カヨが心配だった。

だからこそその決断だったのかもしれない。

クラスメートが話している内容から、カヨに関する情報のみを抽出して、何かあったのかを探った。幸いにもクラスメートが話している内容は、休み時間読書しかしないハルカにとって集めやすいものだった。

その結論として辿りついたのが、カヨが嫌われた、ということ。

カヨの友達をうる覚えながらも、探し出し接触。なぜ、そうなったのかをそれとなく聞いていたのだ。

もちろん、その人からなぜ学年一の秀才が不良女子高生について知りたいのかと、疑問に思われた。それでもどうしても知りたかった。

今考えれば、なぜ自分がそんなことをしているのか分からなかった。

まだ知り合って少ししか経っていない。それも学校では話さず、オオミヤソニツクだけで話す特異な関係。

「あー、カヨね。あいつ、口悪いでしょ？だから、友達の中でもけっこー嫌われてんだよねー。あ、そっか。カヨが口悪いって知らな

い？　あまり学校でも口利かないし」

「それで……？」

「きっかけはホントに何でもないことだったんだけど、カヨが仲間のこと悪く言い過ぎて。いつもなら笑って流せることだったけど、今日は我慢できなかつたみたい」

カヨの友達は、髪の毛を弄りながら、少し寂しそうな顔になった。

「だから、謝れっていったんだ。でもあいつ、あんな性格だから謝んなかった。謝れば終わったのに」

「……」

「もちろん、カヨが悪いってのは確かだからさ。だから、私たちはカヨとゼツコーしたのさ」

「……でも」

「うん。もちろん私たちは仲直りしたい。カヨさえ素直になってくれればだけど」

「そっか…ありがとう」

まだ、その友達に仲直りできるチャンスが残されていたのか、ハルカは安心した。

これなら、そんなに心配しなくてもいいのかもしれない。

「でも、あいつ、ちょっと変わってるからなー」

「え？」

そろそろ話を切り上げて、自分の席に戻ろうと思っていた時だった。

「ほらあいつ、才校一の不良女子高生って言われてるだろ？でも違うんだよ。私も聞いただけだからよく知らないけど、カヨって昔は優等生だったらしいんだ」

違つと、否定できなかった。

あの性格や外見を見れば、簡単に優等生ではないと分かるはずなのに。

「ここ、県内一の進学校だろ？だから、ここに来たときカヨは優等生だったんだ。髪も黒。煙草も吸わない。イヤリングもピアスも不良とは程遠かったらしいんだ」

「うそ…」

「あんなふーになったのはここに入った後。えつと確か、最初の始まりは先生から言われた一言だとか」

そういえば、前にオオミヤソニックで話していたときそんなことを言っていた気がする。

「ほら、カヨって泣かないじゃない？」

「え？」

「本当に泣かないのよ。私たち、出会ってからけっこー経つけど、カヨって泣かないんだ。私たちの前では決して」

ヨコカワカヨの過去。

「泣かない？」

「うちのなかじゃ、けっこう心配してる。カヨが泣けるように笑わせたり、脅かしたりして頑張っただけ。ダメだった。どこかで1人泣いてるんじゃないかってみんな話してた。あいつのことだから、オオミヤソニツクかな？」

「！」

オオミヤソニツクシティ。ハルカとカヨが出会った場所。

「友達なんだから、もう少し頼ってくれば嬉しいのに」

残念そうに肩を落とすカヨの友達。

「……」

「そー見えないでしょ？ カヨ、いつもおしゃべりで、みんなを楽しませてくれるけど。ケタケタ笑う、あれってさ。裏返しなんだって最近気付いたんだ」

「裏返し？」

「そ。馬鹿みたいにケタケタ笑って、強がってさ。ほんとに寂しい癖に。誰にもわかってもらえないなんて思ってるの。もー遅いけど。」

もう少し早く気付いてやればよかったかな……」

「友達思いなんだ……」

「っ……内緒だぞ」

二人で少しだけ笑いあった。

カヨが不良女子高生になったのも、何かがあったから。それをつい最近知った。

それが自分のことを知ってくれない葛藤だとしても、恨みでも、人は変わってしまったことになる。

その女の子がハルカカヨの前に今佇んでいる。

「だから、同情でもしてくれるっの？」

「？」

冷たい、何かがもうどうでもいいような視線。表情は笑顔、その裏の寂しさが隠せないでいるのがわかった。

「私達ってここだけの関係だろ？アンタに同情なんかしてもらいたくない」

「悲しくないの？」

「！悲しくない」

「うそ。だってそっぴう風に言っても、顔が辛い顔してる」

「……じゃ、なんだ？もしここで私が悲しい、辛いって言ったら、

「アンタは何してくれらんだ？」

「それは……………」

「アハハハ」

言い淀んでしまったハルカを尻目に乾いた声で笑うカヨ。痛々しくてもう見ていられない。笑い声は止まらず、誰もいない広場に狂った声が響いていた。

笑い声が止まるとそのまま睨まれ怒声。

「アンタに友達なんていないじゃないッ!！」

その一言が。

その言葉が。

ハルカのなかの三年間を思い出させる。
考えたくなくても、頭の中でそれが。

反芻。幼馴染の言葉。

反芻。何も出来ない自分。笑えない。

ハルカの顔が絶望で彩られていくのが誰の目にも分かったはずだ。
言っではいけない、それを知っていて。

自分の目頭が熱くなっていた。

瞬きすれば、その反動でこぼれそうになる。それを必死に我慢して。我慢して。

カヨを見ると初めて口を押さえていた。

それが、言っではいけなかった禁句で、本心ではないことを示そうとしていたのか？

驚いた顔でふるふると体を震わせてこちらを見ている。

そんなことがまだ分かる自分に、少し苦笑した。

「う、ん…そーだね」

頷きと共に言った声が裏返ってしまい自分でも驚いた。いつのまにか自分の心のなかはもう泣いていたのだと、気付いた。

そんなこと、もう認めていた。

言われなくても、分かっていた。

自分が笑えなくて、過信して、何も出来ない癖に。それが自分の力ではないことを知って。自らを傷つけても。

悲しいことには他ならない。

ハルカ自身が変わるわけではない。

変われないのだから。

それを認めるハルカを見てカヨの表情が凍る。それは怒りとなつて、カヨを爆発させた。

「ふざけるなッ!!」

「痛ッ!」

投げつけられたのは100円ライター。いつもカヨが煙草を吸うのに使っているものだ。それがハルカの顔に直撃した。

「はあ、はあ…はあ」

息を荒げてカヨがこちらを睨む。

投げつけられたライターが磨かれた石の床を滑って、どこかへ行ってしまった。

「なんで、アンタは! なんで……」

「……………」

声を荒げて言ったその言葉は続けられることはなかった。
でもハルカには言わずともそれが何と云っているか不思議にも分かった。

どうして、泣いてもそれを認めるのか？

どうでもいいように、どうしてその事実を肯定できるのか？

そんなことしたら、アンタはどうやって笑えるのか？

(笑えないよ)

ハルカは涙を浮かべつつ、自虐的にその疑問を心の中で答えた。

「……………」

舌打ちをしてまたカヨは段差に座り込む。

まるでハルカの答えがカヨにも聞こえたように、苛立って煙草を取り出す。

「くそ」

取り出したはいいが、ライターを投げ飛ばしてしまったことに気づき、毒づいていた。

「……………」ヨコカワさん

「……………」

無言。

ビル風が通り道である広場を通り、寒さを感じさせた。近くの公園からか、子供たちの笑い声が聞こえる。

カヨのことを考えずに少しやりすぎたかなと思い、ハルカは謝ろうと思った。

カヨを見て、謝ろうと思った時。

「……あ」

どちらが声をあげたのかわからなかった。

なぜなら、カヨがいつのまにか涙を零していた。

「は……あれ？」

慌てて、カヨが自分の顔を袖で拭う。

間違いなく、カヨの瞳から一筋涙がこぼれていた。それが自分の意志かは知らない。どちらかというとき無意識のうちにといい感じがした。

「ヨコカワさん？」

拭っても、拭っても無駄だった。

カヨの瞳から涙が零れる。

「……見るなっ」

真っ赤な顔で必死に我慢していても、涙が止まらない。なぜ泣くのか？

あんなに怒っていたはずのヨコカワカヨが。

一緒にいるだけ。それもこの場所だけ。
話さなくても、ただ一緒にいるだけで、隣に
いるだけで、それが二人の関係でも。
話さなくてもいい。
笑いあわなくてもいい。
ここにいれば、それだけで。

「う、く」

ヨコカワカヨは気付いていない。
なぜ悲しくもないのに、勝手に涙がこぼれるのか。
どうして泣いているのか。
それが、アライハルカのおかげだということも。

(なんで、なんで止まらない)

必死に我慢しても、心のどこかが緩んでその我慢を無駄にさせていた。

オオミヤソニックに吹くビル風、春一番。温かみなどない冷たい風がカヨの心をさらに泣かせていた。

「友達」

2

オオミヤソニックシティ。広場。
特等席。

アライハルカなし。

「……」

いるのはヨコカワカヨのみ。

煙草も吸わず、ただ段差にすわり広場を見渡すだけ。

その姿は黄昏ているようにも見える。

いつもの彼女らしくない。

「ふー」

煙草の煙ではなく、ため息。

アライハルカの前で泣いて二日たった。

しかしその二日経っても、カヨは動揺していた。

考えるのはハルカのことばかり。

浮かぶのも。

気付けば、ハルカのことばかり思っていた。

恋なんだろうか、なんて馬鹿げたことも考えたが、拭い去れない。

(なんで、あいつのことなんか)

ヨコカワカヨは、今日久しぶりに登校した。気分が変わったわけではないが、アライハルカが登校しているのではないかと思い、わざわざ登校したのだ。

しかしその当の本人は珍しく欠席。

授業中もたまたまにハルカのことを見ていたが、欠席したその席があるだけで、何かカヨにとって違和感があった。

いなくても、その席を見つめることが多くなっていた。

授業中も。

休み時間も。

学校が終わった放課後も。

1人で。

なぜそんなにアライハルカのことを考えているのか分からない。間違いないのはアライハルカがいないのが、カヨ自身を落ち込ませていたということ。

それだけは確かだった。

オオミヤソニツクに来てもその喪失感は消えない。まつすぐ帰ろうとしたが、足が自然とこっちの方に向いて来てしまった。

(何やってんだ、私は…)

ポケットから煙草の箱を探し出し一本だけ取り出す。そういえば今日一日悩んで煙草を吸うことを忘れていたことに気付く。

オオミヤソニツクの広場にはヨコカワカヨ1人だけ。

その隣にアライハルカはいない。

気付けば、隣にいるものだど、ずっと錯覚していた。

「友達か…」

一度啜えた煙草に火をつけず、またその煙草を口から離し、放り投げてしまった。

友達のこと、あんなに口論したのに不思議と恨んではいなかった。

「なんだよ、そんなにアイツのことなんかで悩んでんなら、もう友達じゃねーかよ」

漸くやむようの結論に、ケタケタと笑うカヨ。そこには裏返しの寂しさは垣間見えない。あるのはそれに気付かなかった後悔のみ。

「……馬鹿だ。あいつのことが、忘れらんねーなんて」

知らなかった。

ただ一緒にいただけ。

時に話して、時に無言で。それだけの関係だったはずが、ただ一日隣にいないだけでその喪失感がカヨの体を蝕んだ。

隣で本を読んでいるはずの文学系少女。

今日はいない。

その存在がカヨにとっていつの間にか大事なものになっていたのだ。

「アハハハ、なんだ。そんだけのことだったんだ」

春一番の冷たい風が吹く。

そんな事実気付けなかったのが可笑しいのか、カヨは笑った。いつのまにかカヨにとって、ハルカは友達になっていた。

「決意」

四幕、すれ違いも春一番の悪戯だった

二月四週目の木曜日

「いいのか？」

担任の関先生が、再度の確認をとる。

職員室の暖かい空調が、寒い廊下と比べ格段に効いていた。

「はい、いいんです」

「せめて、皆に一言ぐらい言ったらどうだ？」

少し考えたふりをして、もう一度否定。

「いいんです。どうせ言っても、何も感慨なんてありません」

「そんなことをいうな。一年間すごしたクラスなんだから。そうか……わかった。今日の卒業式の予行練習が終わったら、皆に私から言おう。残念だよ。もう何ヶ月も前から決まっていたことだとしても。何も卒業式前日に転校とはな」

アライハルカは転校する。

それも今日、卒業式前日の日を以って。それを皆に伝えることはない。言ってもアライハルカにとっては何も意味を成さないから。

「先生、お願いがあります」

「ん、何だ？」

そう言ってアライハルカは手元の袋からあるものを取り出した。

2

「失礼しました」

一礼をして、職員室を後にして冷たい廊下に出る。

他の人たちは今頃、体育館の方で卒業式の練習をしているだろう。そこにはハルカはいない。もうこの学校の生徒ではないのだから心残りはない。

誰にも言わなくても、きっとクラスはハルカなしで廻っていく。それが良い意味でも悪い意味でも。

転校することは誰にも言っていない。

伝統ある校舎の古びた感じが見れなくなるのは残念だったが、他には何も未練はない。

このクラスでの感情なんて。何もない。

「……ヨコカワさん、何で来ないんだろ？」

ヨコカワカヨは今日学校に来てはいなかった。効くところによると先週の木曜日は来たらしい。

ハルカが引越し先を見に行くため、都内の大学にある学生寮へ行った日に、丁度ヨコカワカヨが来た。

偶然なすれ違いだった。

たまたま来てくれたカヨと逢えなかったのだから。

ヨコカワカヨにも、あの口論以降一回もあっていない。会いたく

ても、会えなかったというほうが正しいのかもしれない。

まるで偶然に似た神様の悪戯。

ハルカにはカヨが来て欲しい理由があった。

どうしても来て欲しい理由が。

なぜならアライハルカはヨコカワカヨに転校することは言っていない。クラスの誰にも言っていないから当たり前のこと。

クラスの誰かと仲良くなるなんてハルカ自身思っていなかったから。それに否定されたこともある。口論以降、カヨが怒っているのではないかとも考えた。

だから口で言えなかった。

諦めようともしたが、それでもカヨのことが頭から離れなかった。このまま何も言わず去ってしまってもいいのかも考えて。

言わずに去ることが出来ない、ハルカは思った。

だから、今日。カヨが来ていたら、転校することを告げてあるものを渡そうと思っていた。

だが、カヨは欠席。いない。

それは言えない、伝えられない、渡せないという意味。

(理不尽だ)

時に世界は理不尽だ。

こんなときこそ、カヨが来てくれて、転校することを告げるぐらいさせてもいいと本当に思った。

でもさせない。させてくれない。

そのもどかしさが、ハルカの心を沈ませる。

分かっていた。

どんなに頑張っても、それが報われないときがある。それでも淡い期待を抱いて、最悪の結果にならないように願っていたのに。

カヨは休んでしまった。

「それじゃ、伝えられないじゃない…」

誰もいない廊下に、独り言のように呟いた一言が響く。響いたのは言葉だけ。思いは響くことなく霧散してしまった。

誰も聞いていない。

体育館から、先生の話すマイクの音が風に流れて微かに聞こえてくる。

「帰ろう」

もう、先生にも挨拶を済ませたので、アライハルカにはここでやることもない。

わざわざ卒業式の予行練習に出ることもない。もちろん、別れを言うつもりもない。

帰って、オオミヤソニックに行こうとしたが、そんな気分にはなれなかった。

ここで経験したのは、結局記憶すら残らない。あるのは自らを傷つけるキツカケを作った三年間だけ。

その校舎を眺めて、アライハルカは最後に一礼をした。

それは感謝の気持ちからではない。大事なことを気付かせてもらった礼として。

時刻はまだ2時にも満たない。

アライハルカの三年間は今日を以って終わる。何も無い三年間だった。

何も感じてないようにそう思っているが、実際涙が出るほど、辛かった。

今日でここを去ることも。ずっと1人だったことも。

(さよなら、オオ校)

振り返らない。

振り返る必要などない。

アライハルカはカヨのことを思いながら、帰宅する。
別れを言えなかつただけ。

それがずっと心の奥底で引っかかっていた。

五幕、それはまるで映画のワンシーンみたいで

三月一週目、卒業式

君が代。 仰げば尊し。

歌っても、高校生活の終わりが来たなんて実感が無い。

ヨコカワカヨは卒業式も休もうと思っていたが、先生からの催促で仕方なく出席。

出ようと思っただのは、高校生活の最後だからというわけではない。アライハルカが来ていると思ったから。

アライハルカに大事なことを伝えようと思っていた。

だが、おかし。

必ず、卒業式には出席すると思っていた。

なのにアライハルカはいない。

余程のことが無い限り、普通はこの行事を休もうなんて考えはしない。

カヨみたいに面倒くさがって来ない場合はあっても、ハルカがそんなふうに住むとは思えなかった。

教室に戻ったとき、ハルカはまだ来ていなかった。遅刻したのかもしれないと考えていたカヨにとって、それは最悪なケースになる。

アライハルカと出会うのは今日が最後なのだ。今日を境に、関係がなくなってしまうのだから。

時刻は11時を過ぎたところ。

クラスの女子が何人が泣いている。

そんな姿を見ても、カヨは感慨すらない。頭の片隅にあるのは、ハルカのことだけ。

卒業式に来ないハルカのことが、カヨの心をいらつくさせた。

そんなことを考えていると、教室のドアが開き、担任が顔を覗かせ誰かを探している。

「ヨコカワ。ちょっと来い」

「あ？」

手招きされてカヨは仕方なく廊下に出る。

そういえば、卒業式の予行日を無断で欠席していたことを思い出し、それでまた説教を食らうのかと内心うざかった。

担任は卒業式を終えたばかりなのか、いつもの私服ではなくスーツ姿だった。

「なんすか？」

「ふう、お前な……」

このパターンは説教だ。

一年間もつきあえば、怒られるのかそうではないのかぐらい分かる。

「ちッ、昨日サボったのは謝ります、ただ用事があったんです」

不機嫌な声で、つらつらと話すカヨ。

「そのことは後で聞こう。ほら、お前に渡せと頼まれた」

「？」

手渡された、茶色の封筒。

丸まった女の子らしい文字でこつ書かれている。

「アライハルカ」

「！」

「転校したアライハルカから、お前にだそうだ」

転校。

「あ？なんだソレ。転校？聞いてねーぞ」

「ああ、知らないはずだ。昨日それを皆に言ったのだから。お前がいなかった昨日」

昨日。カヨが欠席した日。

「うそ……うそだ！」

「本当だ。アライハルカは昨日を以ってこの学校を転校した」

耳に入った瞬間、頭で認識する前にそれを感情が握りつぶした。信じられなかった。

やっと、自分の心に整理がついてそれを告白しようと思っていた矢先。

「お前、アライハルカと仲が良かったか？」

担任の疑問。無視。

茶色の封筒から一枚の手紙を取り出す。

その手紙はよく友達同士がやりとりするような可愛い便箋だった。それを開けて中身を確認する。

「なんで！黙ってた！！」

「お前、先生になんて口を……アライが誰にも言わないでくれ、と。そう言ったからそれを尊重した」

カヨの心が揺らぐ。

便箋には以下のように書かれている。「オオミヤ駅。12時13分の電車」と。

それを見た瞬間、カヨの中で何かが壊れた音がした。

次の瞬間、カヨは担任を突き飛ばして走り出していた。

その紙に書かれている場所に。

オオミヤ駅に。

アライハルカに会いに行くために。

時間は丁度一時間をきつたところ。

(今からなら、まだ間に合う！)

廊下をかけ、玄関についてそのまま外に出る。外履きに履き替え

ず、上履きのまま。

無我夢中で。

荷物は、教室に置きっぱなし。定期券も、何も。

あるのは小銭入れだけ。偶然制服のポケットに入っていた。

追いかける。

大事な人を放さないために。

ヨコカワカヨは必死に走る。

アライハルカを追いかけて。

2

カヨはオオ校からバスには乗らず、徒歩でサイタマシントシン駅まで走り、電車でオオミヤ駅に行くルートを選んだ。

バスを使うより、電車の方が速いと思ったから。

幸いにも、スムーズに行くことが出来た。

サイタマシントシン駅についた直後、すぐタカサキ線カゴハラ行きが来た。それに揺られること10分。

オオミヤ駅に無事に着いた。

時刻は11時55分。ハルカの出発までまだ時間があった。

(間に合った…)

だが、すぐに次の問題にぶち当たった。

この広いオオミヤ駅のどこにアライハルカがいるというのか。しらみつぶしに探していたら、タイムリミットがあつという間に過ぎてしまう。

電光案内掲示板を見に行くにも、その電車がどの番線から出るのか分かってても、その見に行く時間がロスになってしまう。

八方塞だった。

携帯電話で乗り換え案内の検索をすれば何線かぐらいはわかるが、その肝心の携帯電話を教室のバッグに忘れてしまっていた。

「ちッ」

舌を鳴らして自分の運のなさを恨む時間すら惜しい。

仕方なく、今ついたこの7・8番線のウツノミヤ線・タカサキ線

のホームを走って探してみることにした。

人はあまりいなかったが、学生服の人は少ない。これならすぐに判断がつく。

時刻は12時丁度。

(時間がない…)

探しても、探しても。

アライハルカは見つからない。

プラットホームを間違えたのかもしれないという疑念がカヨを満たし始めた。

(はあ、はあ、はあ)

息切れと心臓の音が早くなるだけだった。

タイムリミットまで、あと5分を切っていた。

「くそッ！」

こんなときに走りにくいスカートが邪魔だった。

もう会えない。

その感情がカヨのなかで色濃くなった瞬間、風が吹いた。

春一番の悪戯が。

思わず顔を背け、目を瞑ったカヨ。

風が収まると、ゆっくりと目を開けた。

その先。

その先に。

彼女がいた。

偶然にも、アライハルカがいた。

横に荷物を置いてベンチに座っていた。

アライハルカがいたのは、5・6番線プラットホーム。タカサキ線とウツノミヤ線の上りだった。

カヨがいるのはその下りのホーム。逆側。

「ハルカ!！」

大きな声で名前を叫んだ。

その声に気づいたのか、アライハルカがこちらを見て驚く。

「カ、ヨ?」

信じられない表情をしていた。

なんでここにいるの、と。そんな感じに見えた。本来なら、まだ学校は終わっていない。

「ハルカ、私。アンタが!ずっとす」

「」

悪戯だった。本当に悪戯だった。

その声はハルカに届くことなく轟音にかき消されてしまった。

時刻は12時13分。

カヨとハルカの目の前。ハルカが乗る電車が立ちはだかったこと

で。

その声がハルカには届かなかった。

「ハルカ！ハルカ！！」

何度呼んでも、その鉄の塊が邪魔して声を遮っていた。

見えない。

アライハルカが見えない。

（なんで！！）

見渡しても、アライハルカがどこにいるか皆目見当がつかなかった。

ドンドン

何かを叩く音がしたように感じた。

それは、アライハルカが電車の窓を叩く音。

実際は何も聞こえない。

だけど、確かに叩いてた。

「ハルカ！ 私、知らなかった。アンタのことがこんなに、好きだったなんて！」

力の限り大声で叫んだつもりだった。

アライハルカの表情は正に困惑しているようにみえた。

必死に何かをカヨに訴えかけている。

首に横に振って、泣きながら。

（聞こえない）と。

「なんで！なんで！」

思いが伝わらないのか。
せめて、声ぐらい届かせてくれても。
やっと、出会った大切な大事な友達。
一緒にいるだけで。それだけでいいから。
たったそれだけの関係だったけど、この思いだけは伝えたい。
カヨの瞳はもう涙で溢れそうになっていた。
電車のドアが閉まるメロディーが響く。
二人の声が通じないのに、そのメロディーだけが響く。
ドンドン
たった一枚。鉄の一枚が。二人を分かれさせていた。
アライハルカが何かを言っている。
一つ一つ丁寧に発音。
その言葉は。

(と・も・だ・ち)

それはまるで映画のワンシーンみたいだった。
声は聞こえない。
なのにハルカの口の動きでカヨは何を言っているのかが分かった。
大事な一言。
それはカヨが言いたかった一言。
近くにいても、言葉が、伝わらないこの状況で。ハルカは精一杯
気持ちを伝えていた。
ただ、カヨは何回も頷くだけ。
頷いて、ハルカを見つめるだけ。
それ見たハルカは安心したようにゆっくりと笑った。自分の意志
で。
アライハルカが笑っていた。

電車が動き出す。

それと同時にカヨは走り出す。そのスピードについていけるはずもないのに。

ただ、できるだけ、できるだけ追いつくために全速力で7・8番プラットフォームを走る。

黄色い注意線の前。

人とぶつかっても、押しのけて走った。

サラリーマンを。

若者を。

ただ、ハルカの乗っている電車を追いかけて。

手は届かない。

届くどころか、ハルカの姿が遠くに離れていく。

それでも走るのを止めない。

止められなかった。

アライハルカがカヨをずっと見つめてくれていたから。

カヨの手だけが泳ぐ。幻を掴みたいに。

「あッ」

カヨは躓いて地面に転び、バランスを失った。

すぐ気付いて、視線を戻したときにはもうハルカをのせた電車は遙か彼方に消えていた。

「ハルカ…ハルカあああああー!!」

我慢できなかった。

他の人に変に見られようとも。どうでもよかった。

ただ、大事な人がいなくなつて、その喪失感に心に穴が空きそう

だった。

気付いた時にはカヨは大声で泣いていた。

電車が行ってしまった先をずっと見て。

その先にハルカがまだ見ているように思えて。

泣き続けた。

泣き続けた。

なぜ、もっと早く気付かなかったのか。

もう少し早く出会えれば、そうすればよかったはず。

なのに、そう出来なかった。

その感情が、カヨを泣かせ続ける。

(ハルカ、ハルカ……ごめん)

その大粒の涙が、ハルカの思いと一緒に流れる。

「友達……う、ぐ、う……とも……だち」

終幕、そう言えばあの時言っていたこと

学校に戻って、カヨは説教をされた。

途中、無断で抜け出して。しかも卒業式の日。

だがその説教もカヨの耳には届いていなかった。

赤い目。

すりむいた足。

上履きは泥だらけ。

ハルカのことを少し思い出しただけで、思わずカヨは泣きそうになった。

本当は涙もろいと知って、カヨは苦笑した。

解放されたのは夕方。もう夕日がちらちらと光って教室を照らしていた。

黒板には、おめでとくと色とりどりのチョークで書かれていた。

カヨの机には、置き忘れていた茶色の封筒があった。

カヨはそれをもう一度開けて中身を確認した。

「これは……？」

その封筒には、一枚の便箋と他に紙で梱包されたものが入っていた。

その包装紙をびりびりと破り中身を取り出す。

それは、一冊の本。

真っ赤なハードカバーの本。

題名にはこう書かれている。

『忘れない、君と過ごした短い春』

そして本と一緒に一枚のメッセージカードがあった。

「ん？」

『私の一番好きな本です』

そういえば、ハルカの一番好きな本を貸してくれると強引に言われていたことを思い出す。

「何だよ、ただ冗談で言っただけじゃねーのかよ…？」

カヨの言葉が震えながら、その本を手取る。表紙をめくった先、ある言葉が目にとまった。それ見たカヨは思わず泣いてしまった。

『私の友達へ』

そのとき初めて、ヨコカワカヨは自分の意志で泣いた。悲しいとか、楽しいとか、嬉しいとか、嬉しいとか。そういうものではない。心に直接伝わったから泣いた。カヨは泣く。友達の優しさを身を感じながら。

終幕、そう言えばあの時言っていたこと（後書き）

春の物語は終わらない。

そこに、別れ・出会いがある限り、必ずまた春は巡る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5451b/>

忘れない、君と過ごした短い春

2010年10月28日03時31分発行